

エンゲルスの唯物論・自然弁証法は時代遅れだ  
竹之下 芳也（北九州市立大学名誉教授）

\*『マルクス=エンゲルス全集』第20巻、『自然弁証法』、337p、大月書店、（1963）を中心に論じ、21世紀の現代にあって、エンゲルスの自然弁証の議論は、今もって説得性を持っているのかを問うのが目的である。

《1》序論の問題点：自然哲学の歴史を記述しているが、近代学問の扉を切り開いたケプラー、ガリレオ、ニュートンの評価がほとんどされていない。ケプラー、ガリレオ、ニュートンの認識の進化を分析した武谷光男の3段階論でも（今日では、あらゆる段階で人類の認識が3段階で進むか問題だが。）エンゲルスによれば問題にならないことになろう。

エンゲルスが最大の評価をしているのはカントの星雲説である。このことによって、太陽系の最初の一撃の根拠が与えられ、惑星が太陽の周りを回っているという。エンゲルスはいう『ニュートンによって万有引力という派手な洗礼名をほどこされたあの引力をかりに物質の本質的な性質なのだと考えてみたところで、では惑星軌道を最初に出現させる、あのまだ説明されてない接線力はどこから生じるのか？』（345下）と。この時代に、惑星の回転の原因について不明であったことは当然であるから、時代的限界があるのは当然であろうが、エンゲルスはそれをカントの星雲説に可能性を見たという点ではおもしろいというかさすがであるといえよう。エンゲルスはニュートンの“力”を信用していないというか、誤解していた、たとえば『力の観念は、…人体がその環境のなかでおこなう活動から借用してきた観念である。』（396下）といい、これは『虚構の原因』ともいっているほどである。先に引用した『接線力』もエンゲルスの勝手な定義であって、円運動の物理量のなかにはそのような力は定義されていない。また、確かに“力”という概念は人体の活動に根拠を持つのだろうが、それは単なる借用であって、ニュートンが使っている“力：force”は質量掛ける加速度として定義されたものである。

ニュートンの成果の最も重要な点は、古代ギリシヤから続いていた哲学的運動論に引導を渡したことである。運動には根拠・原因があることを示したのであって、現代の唯物論が古代ギリシヤの運動論そのままなのは、誠に時代遅れといわざるを得ない。